

会報

No.16

[会長就任の御挨拶]

瀧澤 菊太郎

今般、平成という新元号になった最初の年、しかも第10回という区切りのよい会員総会において、私が第4代目の日本中小企業学会会長に選ばれましたことは、浅学非才の身にとって甚だ光栄なことと存じ、重責を痛感いたしております。

10年前、有志の先生方と共に本学会設立の企画に参加し、約1年間、諸先生と協力しつつ設立促進の努力を続けた結果、昭和55年10月11日に慶應義塾大学で開催された設立総会において、恩師山中篤太郎先生が初代会長に推挙されたときの感銘がつい昨日のこのように思い出されます。山中先生は前年の初頭から病魔とたたかっておられ、この設立総会で挨拶をされてから3ヶ月後の56年1月に亡くなりました。それから10回目の会員総会で、しかも設立総会と同じ場所の慶應義塾大学で会長に選ばれ、こうして新会長としての挨拶をすることになるとは、10年前にはまったく想像もしないことでした。

この10年間に、世界経済は大きく変化し、日本経済も激変しました。それにともなって、日本中小企業の実態や問題、さらに中小企業観や中小企業政策観も変化し、多様化がますます目立ってきました。また、日本中小企業学会も、設立当初の会員数205名が今総会時には393名と2倍近くに増え、発足当時は東部、中部、西部の3部会だったのが、九州を加えて4部会となり、それぞれ活発な部会活動を展開しております。そして、現在、年2回発行されている会報は16号となり、年1回開催されてきた全国大会での研究成果も現在まで8冊の研究年報として公開されております。

小林靖雄前会長は、第10号会報の「会長就任の辞」において、山中初代会長の「中小企業研究はまさに学際的研究で

あり……研究の立場をこえて、学会という共通の場で、現在の課題として徹底的研究を進めてほしい」という設立総会での挨拶、および伊東岱吉2代目会長の「わが学会においては、何

よりもまず、事実を即して実証を必ずふまえて、できるだけいろいろな視点から、ひろく自由に論じうる場を作り出さねばならない」という第5号会報での「新会長就任の辞」を引用しておられます。ここでのべられていることは、本学会にとって極めて重要な意味をもっていると私は思います。

かねてから「異質多元性」をもつと言われてきた中小企業を対象とする研究は、これまで学際的研究という特色をもつとともに、多様な研究方法がとられ、多様な中小企業観や中小企業政策観が示されてきました。このような中小企業研究の性格はますます顕著になりこそすれ、現在も変わっておりませんし、今後も変わることがないと思われます。これまで3代の会長が強調されてきたように、私も、研究の立場をこえて事実を即し実証をふまえつつ、世界的な視野の下で、多様な視点から自由に論じうる共通の場としての学会の意義を肝に銘じ、学会の一層の発展に微力を尽くすとともに中小企業研究の着実な進展と中小企業の健全な成長発展、および中小企業従事者の経済的社会的地位の向上にいささかなりとも貢献したいと念願しております。

最後に、会員の皆様の絶大な御協力を心から御願い申し上げます。そして私の会長就任の御挨拶とさせていただきます。

